らざる、両者何れも不可、而も其の何れをも多く手にした自分である事を殘念乍ら告白して、後輩の誡めに供へて置く。

▲治生産業皆順正法と說かれた經文は明かに法華經が社會生活の上に活きてゐる所である。文筆の業は雅人や閑人の道樂では無い吾人傳燈の徒に取つて文書の努力は正しく五種法師の書寫行であらねばならぬ。文學部の理想が遠大に、その實現が最近に、更に部員諸子の內容の充實をと、切に祈つて擱筆する。

（宗祖誕生會慶修十二日夜）

■降誕會記事

春の野山に霞霧いに霞に包まれて、碧瑠璃の如き岩淸水、眞白な蓮華、淡紅の梅花、種々な瑞相に迎へられて、暖が伏屋の微笑んだ一嬰兒が軈て日本國の柱、杖、眼目、大船にならうとは！聖者の追慕は信力である、寶算六十高峯によぢて御父母を偲ばせられ雲煙を御瞻望遊ばされた、此の身延に集ふた吾々は今茲に第六百九十七回の聖誕を壽ぎ奉り一層追懷を新にしたのであつた。例年の如き祝賀會し本年は木の香幽しき新築校舍で催された爲か特別の温かさ賑はしさであつた。校舍內外の裝飾は總て嶄新な意匠に成り、先づ中一の作たる大緣門を入れば校庭には縱橫萬國旗を張り一段の盛觀を添へた。

午前八時、師徒一同祖師堂に於て嚴肅な一場の法莚を營み、後三々五々各自參拜人の接待役に付いた場內には靑紅白の蓮華を點綴し數間の中空に揚げられしは面貌圓滿のお多福十間四面に紅白の幔幕打張りしは高等部生の甘酒接待所今日の嘉會に列せんとして集まれる夙緣叢發の衆心身共に醍醐の極味に醉ひ、法悅滿面として室內に入る。第七教場に入れば中等部二年の催しにかゝる身延山高座石七面天女示現の飾物六老四擅を始め、驚天動地の大猥猥一滴の法雨に狂悅せる七面の蛇身、參觀者一同六百年前の法座に連りしが如く說明辯士の熱舌に醉ひ一語も發する者はなかつた先づ近來の大傑作であつた、次は第六教室中等部三年同五年の一部の作にかゝる由比ヶ濱訣別の揚山法師が海坊主に成らんとした不自然さは當然で何となく殺風景であつた、然しながら教ゆるもの傳ふるものは師弟の道と孝子の範で、只味ふ可き作であつた。第六教室は中等部四年及五年一部の合催小室善智法印歸伏の場萬事風雅な背景で、毒を仕かけた萩の餅とも知らう筈がない、嬉しまぎれに頂戴した斑犬は吐血してグンナリへたばつてゐる、邪鬼に苦しめる法印は平伏して深刻なる悔悟をしてゐる、又愛す可き作であつた。尙階上登口には如說修行者熱原甚四郎の大幅等皆參觀者をして瞠着たらしめた。又第一、二、三の教場は當日の講演場並に六十餘點より成る選所展覽所に充てられ午後より龜口教授中村講師の講演あり、來會者七百有餘名同五時一同の大努力で無事終了を告げた。更に同六時學生一同大客殿に會して祝賀茶話會を催し併せて選書賞典授與式あり、中高兩部の總代演說あり引續き同八時からは法喜堂にて數番の餘興あり、著音機聖傳涙花節、西洋大奇術、新舊合併仁輪加淸正公御利益現代宗教劇「嵐のあと」

等或る時は頭を解き、或る時は腹を抱へ、或る時は隨喜し、或る時は神々しさに打たれ觀者三百餘名に達し、和氣靄々の裡に萬歳三唱して散會せしは十二時、噫能所俱に法益深大なりし當日の降誕會よ。

■富士五山靜岡地方修學旅行記

五月二十五日、此日大善く晴る、四山の高嶺淡靄に封ぜられ四河の流れ珊々聲あり、東天未だ白まず、山風蓬々嵐氣骨に徹する頃、吾祖山健兒旅行隊の一行は全員三十五名、關本教頭田附中村の両先生大野、脇本、杉本、役課諸師引率の下に旅途に付く、四時祖師堂前集合音吐遵亮法味を獻じ、道中安泰を祈り大野に向ふ。五時舟人の一竿に身命を託す、日既に上りたれども、七面山腹の雲輝光を受けて黄紫を呈し彩光將に流れんと欲す、此の山彼の雲元龜年間割居の英雄信玄の眼には如何に影ぜしか舟岩を嚙む事數度幸なる哉泪羅の鬼ともならず、八時芝川着舟を捨て隊を整へ西山本門寺に至る。當寺は大内廣清殿の建立日代上人の開基、三堂具足も悲哉祖師堂のみ現存す、寂寞たる老形骸にうたゝ今昔の感に打たれ流涕去るに忍びざりき。其れより十五町にして弘法山三澤寺に至る、時に十一時、山主の御厚意に依り香茶を頂戴し山奥より運搬せし竹皮包を開く、炎熱加わると共に意氣益々盛なり。正午富士山妙蓮寺參拜、開基は日華上人、南條殿の建立、老樹鬱蒼として堂塔嚴備す院籍の青き眼ある可き事別して身延山一行と聞くからには近傍に南條殿御夫婦の御墓ありと聞けども詣でず、愴惶として歩を進め大石寺に向ふ、一時十分着、總門内両側に十三箇坊整然列を爲す、宗門專門道場を右手に見つゝ祖師堂に參拜、法味獻上す、當山は大日蓮華山大石寺と號す、三堂蕭然として甍を並べ宏壯なる伽藍は富岳と對照の妙を得、能く興師當年の壯圖を語る、御厚意に依り寶物拜觀を許さる、山主阿部日正師清淨の大衆を統し莊嚴に開扉せらる「又如一眼之龜値浮木孔」情激する時は語逼らざるを得ず、只數反の唱題にて默禱す、一同靈感に打たる。言無く語無く文字無し、當山を辭せしは四時半、時に小雨降り來る、宗祖常住不滅の御涙か興尊道場影現の御涙か「各自の感興言外に在り、十有餘丁にして北山本門寺に至る、當寺は日法上人開基永仁六年二月十六日本門二堂建立後堂宇の興亡盛衰屢今は庫裡及假本堂あり、門前に數十株の老杉門内に一老樱樹あり、皆興尊の御手植と傳ふ、本堂右裏手に興尊御茶毘所並御廟所身延山遙拜日澄上人御墓等あり、左手數丁にして玉樹山正林寺あり、是れ頂尊隱世の地にして御母公妙常日妙御妹乙御前妙國尼と共に御墓所在り。嗚呼、千載不幸の人として許されず、父泣き子泣き滅後門下の紅涙を搾りし泣銀杏！又日奠上人腰掛の石發願の梨重須檀林跡あり、頃は正安元年の澄み透た月の夜に寂寥を破つて嗣々と響く興尊轉法輪の御聲がひたと止つた、はつと我に歸つた尊師は毎年鶴林會の際に櫻樹の下の石に憩ふては正御影の尊像を伏拜する身となつた師嚴にして道尊の御垂訓げに聖祖門下の生ける龜鑑